

# 夢駆ける馬ドリーマー

2006(平成18)年5月15日鑑賞(試写会・大阪厚生年金会館芸術ホール)

★★★★



監督・脚本=ジョン・ゲイティンズ/出演=カート・ラッセル/ダコタ・ファニング/エリザベス・シュー/クリス・クリストファーソン/デイヴィッド・モース/ルイス・ガスマン/フレディ・ロドリゲス/オデッド・フェール (アスミック・エース配給/2005年アメリカ映画/106分)

## 第2章

DVDでじっくり鑑賞したい

……レースで前脚を骨折したサラブレッドの「復活」は至難のワザ。しかし、馬を愛する家族の熱意さえあれば……？ そんな夢のような物語だが、天才子役ダコタ・ファニングを含めた頑固者の親子3代が馬に対して示す愛情をみれば、「なるほど」とうなずけるもの。仔馬を産ませて稼ごうというプランが不可能とわかった時、今や馬主の地位を父親から引き継いだ少女は、年に1度の重賞レースへの出走を決意。「そんな、無茶な……」と思うことでも、願いをかければ夢はかなうのだろうか……？ 「競走馬モノにはずれなし」と実感！

## 競走馬が生む感動とは……？

この映画の謳い文句は、「人はみなドリーマー 夢にむかって走れば奇跡はおこる！」だから、5月27日に公開されるサッカーの感動モノ『GOAL！』(05年)と同じように、結果は見えているはず……？ 1頭の競走馬が、経済恐慌に苦しむ1930年代前半のアメリカ国民に夢と勇気そして感動を与えた物語が『シービスケット』(03年)だった(『シネマルーム4』65頁参照)が、『シービスケット』もこの『夢駆ける馬ドリーマー』も、クライマックスを最後のレースシーンに設定しているのは当然。そして、その結果は優勝、とあらかじめわかっている(?)ののだが、それでも手に汗を握りながらスクリーン上で展開される勝負に胸を躍らせ、その結果に感動するのが映画ファンであり、人間。ちなみに昨日5月28日の「日本ダービー」では、予想どおり(?)メイショウサムソンが優勝した

が、これではあまり大きな感動は生まれにくいかも……？

## 「競走馬モノ」にはずれなし……？

「潜水艦モノにはずれなし」とよく言われるが（『シネマルーム2』「潜水艦モノ映画は名作ぞろい」100頁参照）、それと同様に「競走馬モノにはずれなし」だ。『夢駆ける馬ドリーマー』と同じく、5月27日に公開される『雪に願うこと』（05年）は、東京国際映画祭で4冠を獲得した感動作だが、これも競走馬の物語……。といってもこれは、「もとは農耕馬だった挽馬たちが数百キロ以上もあるソリを曳きながら障害を越える“ばんえい競馬”」の競争だから、優秀なサラブレッドたちが世界一の速さを競うレースとは全く異質のもの。しかし、競走馬をめぐる人間模様と、レースでの勝利の喜びと感動は全く同じはず……。

## いかにもアメリカ的な家族愛がいっぱい

この映画の一方の主人公は、競走馬のソーニャドールだが、他方の主人公はケンタッキー州レキシントンの牧場で生活している、いかにもアメリカ的な家族。今どきの「何でも協調」の日本人とは違い、アメリカ人とりわけ昔の田舎住まいのアメリカ人には頑固者が多かった……。祖父ポップ・クレーン（クリス・クリストファーソン）の頑固さを嫌っている父親のベン・クレーン（カート・ラッセル）だが、自分だってものすごい頑固者……。今はパーマー（デイヴィッド・モース）が経営する牧場で馬の調教師として雇われているが、次々と土地を手放し、家計が火の車となっているのは自分の頑固さのせい……。彼の頑固さとはつまり、馬に対する愛情と牧場経営あるいは顧客へのサービスの両立というバランス感覚に欠け、前者に偏りすぎていること……。そして、血は争えないもので、一人娘のケール・クレーン（ダコタ・ファニング）も馬が大好きで、父親の調教につき合っている時が1番楽しそう。そして、夫の頑固さを認め夫を愛し、パートの仕事も辞さずに明るく家族をまとめているのが妻のリリー・クレーン（エリザベス・シュー）。祖父と「スープの冷めない距離」で暮らしているのは、頑固さがぶつかり合うケンカを避けるための暗黙の生活上の知恵……。そんな少しケツタイな、いかにもアメリカ的な家族だが、ある日大黒柱のベンが雇い主

のパーマーと大ゲンカをしたため、家族全体に大きな転機が……？

## 競走馬の足の骨折は致命傷

ベンが調教しているソーニャドールは、アラブの王子様の兄殿下であるサディール王子（オデッド・フェール）から預かっている牝馬。この兄殿下に何ゴトにおいても対抗するのが、弟殿下で、それは競馬においても同じ。こんな大金持ちでワガママな馬主は金はいくらでも出すから、ある意味ではいい顧客だが、調教師の意見を聞かないワガママ馬主という意味では扱いにくい存在……？

ある日のレース。ベンはソーニャドールの前脚が妙に熱を帯びているため「出走を中止すべき」と進言したが、パーマーは聞く耳を持たず出走を強行。しかししてその結果、いよいよラストスパートをかけようとしたソーニャドールは前脚を骨折して転倒……。競走馬が前脚を骨折するということはまさに致命傷で、「選手生命を失った」ことと同じ。したがってパーマーの「撃ち殺せ」という指示は、特に冷酷なものではなく、当然の処置。それは祖父ポップの判断も同じであったことから明らか。ところが、そこでムクムクと湧いてきたのがベンを持ち前の頑固さで、ビジネスを度外視して、自らのクビをかけて前脚の折れたソーニャドールを連れて帰ることに。その後はソーニャドールの治療とリハビリだが、先例によると、脚を骨折した競走馬が再びレースで復活した例は1件だけ……？

## 意外な神の摂理にビックリ……

ベンのような行動はソーニャドールに対する愛情から出たものだが、その選択は経営者としては失格……。いくら費用と時間をかけて治療してもその先行きは不明なうえ、重要な収入源であるパーマー牧場での調教師の仕事をしてしまったのだから、そもそも家計が成り立たないことに……。そこでベンが考えたのが牝馬のソーニャドールに優秀な種馬を交配させて生まれた仔馬を売ること。こりゃグッドアイデア……。頑固ながら多くの人たちに愛されているベンには、最高の種馬が世話されたが、そんなベンたちの努力にもかかわらず、神の摂理はいかんともしがたいもの。人間だって、いくら子供が欲しくても妊娠できない女性がいるのと同じように、馬だって……。ある日、下された獣医からの宣告は……？

## 動物と子供の純粋な愛情は、それだけで感動的

大人が動物に対して示す愛情には、どうしても何割かは「計算づく」の要素が入ってしまうが、子供にはそれがなため、動物と子供との純粋な愛情はそれだけで感動的。今年の春休み、このテーマで人気を呼んだのが『子ぎつねヘレン』(06年)。これは「見えない・聴こえない・におえない」という三重苦をもった子ぎつねヘレンと、たまたまそれを拾いあげた少年との純粋な愛情の物語だった。

この映画では夜、父親の目を盗んで1人ソーニャドールのもとへ行き、アイスキャンディーを食べさせるケールの行動などで描かれる、動物と少女との愛情物語は笑いを運びつつ、ラストの感動に向けた伏線となっている。お金の計算を離れ、純粋に示される少女と馬との間の愛情は、それだけでホントに感動的……。

## 教育論の絶好の素材としても……

『アイ・アム・サム』(01年)や『宇宙戦争』(05年)などに登場した、少女ケールを演じるダコタ・ファニングは、ハリウッドを代表する名子役だが、この映画では父親と牝馬ソーニャドールを心から愛する素朴な田舎の女の子役を実に心地よく演じている。そしてこの映画は、娘の教育論としても絶好の素材……。

ベンがソーニャドールを愛する気持とベンが牧場経営によっていかに収益をあげるかの計算が一致している時はいいが、時にはそれが矛盾することも……。そんな時に生まれるのが父娘の対立だが、まず第1にこの映画では、そんな局面におけるその解決方法が教育論として参考になるもの……。第2は、ベンが馬主としての権限をすべてケールに委ねると決意した後の、子供ながら堂々としたケールの経営姿勢と、あくまでサブ的役割に徹する父親ベンの姿勢。この合理的な割り切りはいかにもアメリカ流で、日本ではなかなかこうはいかないのでは……。ソーニャドールがブリーダーズ・カップ・クラシックに出場することができたのは、父親のこんな立派な、娘に対する教育のおかげ……？

## 共通の目標さえあれば……

今日、日本の家族がバラバラになったのは、戦後民主主義教育の中で個人主義

が徹底されすぎたうえ、それがヘンに日本流に修正されてきたため……？ 昔は、良くも悪くも「国」の目標があったし、「家」の目標があったから、「国」や「家」がまとまっていた。したがって、あちこちで家族の絆が失われた今、それを再度取り戻すための有効な手段は、共通の目標をもつこと。これは例えば「来年の正月までに100インチの薄型テレビを買い、家族そろって『紅白歌合戦』を観ること」でもいいのだが、現実問題としては、家族としてそういう共通の目標を立てることすら難しいのが日本社会における家族の現状……？ ベンたち家族の共通の目標となったのは、ソーニャドールをブリーダーズ・カップ・クラシックに出場させること、そして優勝を目指すこと……。「そんなこと、とてもムリ」と言ってしまうえばそれっきりの話だが、大切なことは、目標を実現すること以上に、目標に向かって家族が心をひとつにして努力すること。そんな、今どきの日本社会で失われた、共通の目標に向けた家族の姿が、この映画ではいきいきと。

### 注目のレース展開は……？

ソーニャドールがブリーダーズ・カップ・クラシックに出場するための壁は、お金の問題を中心としてさまざま。それをベンやケールたち家族が力を合わせて1つ1つ乗り越えていく様子は、映画をじっくりと観て共にその喜びを共有してもらいたいもの。そしてハイライトは当然、最後のレースシーン。あの名作『ベン・ハー』（59年）におけるベン・ハーとメッサラとの戦車競争のハイライトシーンには到底及ばないが、それでも迫力満点、そして手に汗を握るシーンとなっている。そして、その興奮度は『シービスケット』と同じ……。

ソーニャドールに乗る騎手は夢の舞台ははじめてという無名のマノリン（フレディ・ロドリゲス）だが、彼は落馬して大ケガを負ったというトラウマを抱えているうえ、にわかダイエットをしたばかり……。しかもソーニャドールは、右前脚の骨折は癒えたはずだが、今日もその足が熱っぽいという危険な状態。そんな状況下、馬主用の貴賓席で見守るケールを狂喜乱舞させる結果となるようなレース展開ができるのだろうか……？ その感動は是非映画館で……。

2006(平成18)年5月29日記